

藤原良経「二夜百首」考——速詠百首歌から見る慈円との交流——

小山順子

はじめに

建久元年（一一九〇）十二月、藤原良経は速詠の百首歌を詠んだ。定家と慈円を誘って詠まれたこの百首歌は、良経の家集『秋篠月清集』に「二夜百首」（以下、本百首と略）、慈円の『拾玉集』には「当座百首」と題して収められている。なお、定家の詠んだ百首は残されていない。

『秋篠月清集』には、本百首の跋文が記されている。

建久元年十二月十五日、於内裏直廬詠之、亥一点始之丑終詠六十首、同十九日戌終重始之子剋終百首篇、於兩夜之外者及誓状一首不廻風情者也

十五日の月食の夜に内裏直廬で六十首を、四日後の十九日の夜に残りの四十首を詠んだことが知られる。四日間を隔てているが、この二夜の他には誓っても「風情を廻らさざる者也」、すなわち歌想を練らなかつたと、あくまでも速詠であることを言明しており、それが「二夜百首」の題

にも表れている。本百首の評価については、久保田淳氏^三は、佳作が乏しいこと、後の詠作の習作的な歌が詠まれていることを指摘している。本百首からは『新古今集』には一首が入集しているのみで、この数は、『秋篠月清集』に収められている八種の百首歌、二種の五十首歌の中でも最少である。

本百首に秀歌が少ない理由としては、速詠であったために沈思・推敲を重ねていないという点が大きいと推測される。文治・建久期は、新風歌人に速詠が流行した時期であり、特に慈円と定家は数種の速詠歌群を残している。建久期に定家が詠んだ速詠の中には、良経が出題し命じて詠ませたものも多いことから、良経が速詠という表現方法に関心を持っていたことは確かである。しかし良経自身が詠んだ速詠で、『秋篠月清集』にまとめて残されているのは、本百首のみである。それ以外には詠まなかつたということではなく、良経が残そうとしなかつたものと推測される^四。それでは、本百首は秀歌が少ないとはいえ、定数歌として

まとめて、家集に残すだけの意義があつたのであろうか。小稿は、良経の本百首の表現を検討し、良経の百首歌群における意義を考察することを目的とする。

一

本百首には、先行歌からの表現撰取が著しい。特に西行歌からの撰取については、久保田氏と稲田利徳氏^②の、源俊頼歌からの撰取については新名主祥子氏^③の指摘がある。

久保田氏は、西行や俊頼といった前代歌人ばかりではなく、周辺歌人からの表現撰取が本百首に見られることを指摘する。そこで久保田氏が掲げる例とは他の、周辺歌人からの表現撰取を掲げる（以下、注記のない番号は『秋篠月清集』の新編国歌大観番号）。割注で示したのは、先行歌の詠歌年次である。まず、二句に渡って撰取しているものから掲出する。

①ともしするはやましげやまさとをみほぐしもつき
ぬあけぬこのよは (117 照射)

ともしするは山しげやま露ふかしみだれやしゆるし
のぶもちずり

『拾遺愚草員外』 141 一句百首 續久保田氏・夏

②つゆふかきまがきのべをかきわけてわれにやどかる
さをしかのころ (132 鹿)

人もがな

『拾玉集』

118 文治五年、
519 九月

『寂蓮集』 213

①の定家「一句百首」は、本百首と同年六月に詠まれたものである。第二句「は山しげ山」は、「筑波山 葉山繁山 茂きをぞや 誰が子も通ふな 下に通へ 我が夫は下に」(風俗歌「筑波山」)「つくばやまはやましげ山しげれどおもひいるにはさはらざりけり」(『新古今集』恋一 101 源重之「題しらず」、『重之集』 308 第二句「さやましげ山」)など、筑波山に続けて用い、繁茂する木の葉の様に人目がうるさいことを掛けるのが常套の詞である。それを照射と組み合わせ、夏山を表す叙景に用いている。背後に「は山しげ山」に続けられることが常の「茂し」を揺曳させ、夏山の葉が濃く茂る様を連想させる効果があると考えられる。

また②は、本百首の前年、文治五年(一一八九)九月に、慈円・寂蓮と交わした贈答歌^④における、慈円からの贈歌である。なお、良経はこの慈円歌に対し「われもしるころは行てみるやどにまがきの野べを分ぬ計ぞ」(『拾玉集』 5679)と、「籬の野辺を」の詞を用いた返歌を詠んでいる。②を詠んだ良経の念頭にあつたのが、前年のこの贈答

であったのは確実であろう。

次に、周辺歌人の先行歌から一句を撰取したり、詞づかいを倣ったものを、煩雑になるが掲出する。

③ひをさふるまつよりにしのあさすゞみこゝにはくれぞ
またれざりける (121納涼)

ながむれば松よりにしになりけりかけはるかなる
あげがたの月 『拾遺愚草』 675花月百首寛久元年九月

④かたやまにいりひのかげはさしながらしくるともなき
ふゆのゆふぐれ (141時雨)

さびしさをなにしたとへん世をすつるよしののおく
の冬のゆふぐれ 『拾玉集』 365取集百首寛久元年以前

さびしとよ秋は過ぬといひがほにみな山里は冬のゆ
ふ暮 『拾玉集』 757早率露胆百首文治元年十月・冬・初冬

あふ坂の山ちも雪にとぢられて関にせきある冬のゆ
ふ暮 『拾玉集』 1092宇治山百首寛久元年五月・雑・関

⑤ほどもなくすぎつるしぐれいかにして月にやどかすな
こりとむらむ (143時雨)

かずならぬひかりをそらに見せがほに月にやどかす
そでのつゆかな

⑥しがのやまこずゑにかよふうらかぜはこほりにのこる
さゝなみのこゑ (146水)

『長秋詠藻』 534右大臣家百首寛久元年七月・月

たにがはのをとはこのほどたえはてゝこほりにの
こる峯のまつかぜ

⑦こぬ人をまつにうらむるゆふかぜにともおもふつるの
こゑぞかなしき (169寄松恋)

山ふかくともおもふつるのけしきにもくものかよひ

ちうちながめつつ 『寂蓮結題百首』 文治元年六月 85さぶ・
せんのみかにつるおほし

⑧あふ人もなきたぐひかなやまぶしのすゝわけわぶるみ
ねのかよひぢ (172寄竹恋)

こよひねてしばしもなれんときは山若つゝじさく嶺
の通ぢ 『拾遺愚草員外』 124一句百首寛久元年六月・春

⑨むらさきにはの春かぜしづかにてはなにかすめるく
ものうへかな (176禁中)

たれすみて心のかぎりつくすらん花にかすめるをち
の山際 『拾遺愚草員外』 11一字百首寛久元年六月・春

⑩難波の浦ひじりのあとにとしくれぬ月日のいるをおも
ひをくりて (188仏寺)

あけくれはにしに心のかかる哉月日のいるをうちな
がめつつ 『拾玉集』 171述懐百首寛久元年冬頃

⑪はりまがたおりによきけさのふなでかなうらのまつか
ぜこゑよはるなり (197海路)

『拾玉集』 171述懐百首寛久元年冬頃

いほりさすのぢも山ちも月さえてお_りよきた_びの
草枕かな 『拾玉集』1372 花月百首九卷元年・月

⑫ かもめうかぶなみちはるかにこぎいでぬよそめばかり
やおきのとも舟
さなみやしがのうらちのあさぎりにまほにも見え
ぬおきのともぶね (199 海路)

『拾遺愚草』231 皇后宮大輔百首文治三年・秋

みなと川けふのとまりをめてかけてゆふ日にいそぐ
おきの友舟

『拾玉集』892 句題百首文治三年・雑・海路日暮

傍線部はいずれも、他の先行例を見出すことのできない
表現である。それも、本百首の同年五月の「宇治山百首」

(④)、六月の「二字百首」(⑨)、「一句百首」(①⑧)、九
月の「花月百首」(③⑩) からも撰取しており、最近の詠

作にも積極的に倣おうという姿勢が顕著である。また、慈
円 (②④⑩⑪⑫)・定家 (①③⑧⑨⑫) からの撰取が多い
ことにも注目される。

慈円からの表現撰取は、これらの例のみにとどまらぬ。
特に、本百首と同年の文治六年四月八日(四月十一日に建

久に改元)に、慈円が隆寛・惟方とともに詠んだ「一日百
首」からの表現撰取が目立つのである。久保田氏は「とも

とみよなるをにたてるひとつまつよなくわれもさてすぐ

る身ぞ」(166 寄松恋)が、慈円の「わが身こそなるをにた
てる一松よくもあしくも又たぐひなし」(『拾玉集』956 一
日百首・松)から影響を受けて詠まれたものであることを
指摘している。但しこの例のみではなく、本百首には「一
日百首」から詞や発想を撰取して詠まれた歌が散見するの
である。

まず、詞を撰取し、更に構成が共通する例を掲げる。

⑬ わがやどをむめにゆづりてたちいでむはなのあるじは
人やとふとて (108 梅)

わがやどは花にゆづりてたちいでぬたづぬる人をよ
そにかぞへて 『拾玉集』905 一日百首・花

⑭ はりまがたお_りよきけさのふなでかなうらのまつか
せこゑよはるなり (197 海路)

うきねする夜半のなごころのほどふけてよさのうら松
風うらむなり 『拾玉集』984 一日百首・海路

こぎいでて今はおきにもなりぬらむきしのまつ風声
よはるなり 『拾玉集』985 一日百首・海路

これらの傍線部の表現は、慈円「一日百首」から撰取し
たものと考えられる。題も類似するかもしくは同一であり、
詞・句の置き所も変えずに用いている。⑬は傍線部以外に
も、第五句が「て」止めになっている点と、下句の「訪ね
て来る人がいたとしても構わない」という内容も共通して

いる。⑭の良経歌は、慈円985番歌から「くの松風声弱るなり」を撰取している。但し同じ詞を用いながらも、慈円は、松風の音が弱まって聞こえることで、岸から遠離り沖にしていることを知ると表現しているが、良経は、船出に適した穏やかな風が吹く様を、船出前のまだ浦にいる視点から表している。また「浦の松風」は、985番歌とその直前、984番歌の下句「与謝の浦松風うらむなり」を合わせていると考えられる。良経歌は、慈円の984・985番一首の、ともに「なり」で結ぶよく似た下句を合わせて、自歌の下句を形成していると考えられる。

次の例は、詞の撰取である。

⑮ すぎぬるかあらしにたぐふむらしぐれたけのさえたに
こゑはのこりて (144時雨)

衣をば竹のさ枝にかけをきてとらに身なげし人を
しぞ思ふ (『拾玉集』961一日百首・竹)

⑯は、題・置き所は異なるものの、「竹のさ枝」という詞に慈円からの撰取が認められる。「竹のさ枝」の先行例は、他には『今撰集』秋79寂超歌に「呉竹のさえたも」という形で見られるのみであり、慈円歌から撰取したと見てよいと思われる。

次に、題と発想の結び付きに、慈円「一日百首」詠が関わっていると考えられる例を掲げる。

⑰ さえがたきしたのおもひはなきものをふじもあさまも
けぶりたてども (160寄山恋)

ふじのねもあさまの山もをのづからたえたえにこ
そ煙たつなれ (『拾玉集』943一日百首・恋)

「富士」と「浅間」を煙の名所として一首の中に詠み込むのは、三代集にも「しなのなるあさまの山もゆなればふじのけぶりのかひやなからん」(『後撰集』離別1308駿河「しなのへまかりける人に、たき物つかはすとて」)の例があるが、並列して、噴煙を胸中の思いに重ねて恋歌に用いる先行例としては、慈円歌を見るのみである。160番歌の「富士も浅間も」とは、慈円歌の「富士の嶺も浅間の山も」を凝縮した表現と考えられる。

⑱ さきのよにいかなるたねのむすびけむうしともいまは
いはしるのまつ (168寄松恋)

千代ふともとけてややまむ結びつる身のうき事はい
はしるのまつ (『拾玉集』961一日百首・松)

⑲は、「結ぶ」「憂き」の詞が重なり、更には「磐城の松」に「言はじ」を掛けて第五句に置くという点が一致する。「結ぶ」と「磐城の松」の結び付きは、有間皇子が護送される途上で松の枝を結んで和歌を詠んだ故事³に依る。岩根に屈折しながら生える松の様子と心の鬱屈を重ねて詠むものが多い。しかし「憂し」に続けて「言はじ」を

掛けて用いるものは多くなく、「あはれともうしともえこ
そいはしるの」のなかのまつむすばれつゝ」(『物語二
百番歌合』326後六十三番右・朝倉女君「むかしのちぎりた
がへずめぐりあひて」)のみが管見に入る。慈円は未来に
ついて自問自答しているが、良経はそれを過去のことを問
い掛ける内容に転換している。

⑧きみゆへもとらふすのべに身をすてむたけのはやし
のあとをたづねて (171寄竹恋)

衣をば竹のさ枝にかけをきてとらに身なげし人を
しぞ思ふ (『拾玉集』97一日百首・竹)

⑨は共に、『金光明最勝王経』捨身品に見える薩埵王子
の捨身説話を踏まえている。捨身説話は『三宝絵』にも採
られるよく知られたものであり、和歌にもしばしば詠まれ
る素材である。ここで注目されるのは、「寄竹恋」「竹」
と竹を主題とするところに捨身説話を取り上げている点で
ある。これは『金光明最勝王経』の「爾時王子摩訶薩埵
還入林中。至其虎所。脱去衣服置於竹上」の記述
を踏まえたものである。薩埵王子が脱いだ衣を竹の林に掛
けたという記事は『三宝絵』にも見られ、『梁塵秘抄』卷
二・雑法文歌にも「太子の身投げし夕暮に、衣は掛けてき
竹の葉に(以下略)」と歌われる。更に歌学書において、
『和歌董蒙抄』第九・獸部の虎の項に「釈迦如来ノ薩埵王

子ト申シ時、虎子ヲウミテウエテフシタリケルヲミマウシ
テ、衣ヲ竹ノ林ニカケ、ミヲ虎ニ送シタマヒタルヲヨメル
ナルベシ」とあり、歌人にも知られたものであった。しか
し、捨身説話と竹を結びつけて和歌に詠む例は決して多く
なく、先行例として管見に入るのは『弁乳母集』33と『六
条院宣旨集』87の二例のみである。竹を題とするところに
捨身説話を詠むという171番歌の発想に直接に寄与したの
は、掲出の慈円歌であると考えられる。

⑩ふえたけのよぶかきねこそあはれなれまたぐひなき
わが身とおもふに (174寄竹恋)

ゆられこしそのものろこしのふえ竹のみをふくほど
のみとおもはばや (『拾玉集』970一日百首・竹)

良経の174番歌は、「ふえ竹のよぶかきこゑぞ、きこゆなる
さしの松かぜふきやそふらん」(『千載集』雑上96大納言
齊信「上東門院入内のときの御屏風に、松ある家にあふふ
きあそびしたる人あるところをよみ侍りける」)からも表
現を学んでいると考えられるが、ここでは「笛竹」の「身」
に着目して詠み込んでいる点に注目される。「笛竹」が和
歌に詠まれる際には、「よ一世・夜」節「伏し」音「
寝」呉竹「こち来」の掛詞が詠まれることが多いが、
「身」を詠む例は珍しい。慈円歌は、「ものろこし唐なる笛
竹は、いかでか此処までゆられ来し、ことよき風に誘はれ

て、多くの波こそ分けこしか」(『古今目録抄』紙背今様)

に拠ったものであるかと、山本一氏（ま）が指摘している。

良経の下句「またたぐひなきわが身とおもふに」は、慈円が「唐から播られて来た笛竹を吹く程の我が身と思いたいものだ」と詠んだことを踏まえ、その内容を「たぐひなき我が身」と詠んでいると解することができ。また、「たぐひなきわが身」の内容は「わが身こそなるをにたてる一松よくもあしくも又たぐひなし」(『拾玉集』956一日百首・松)も参考になる。「たぐひなし」とは慈円歌では、高

潔であるがゆえに、孤独であるという意で用いられている。こうした慈円歌の表現や内容を踏まえて解すると、良経歌は、唐土から渡来した笛を吹く我が身は類いまれな身ではあるが、その類いなさゆえに孤立した存在であると、自身の孤独を表していると考えられる。

以上の例から、良経が本百首を詠むにあたって、慈円「一日百首」から多くを学んでいることは確実と思われる。但し、良経の慈円からの撰取は、単なる詞や発想の撰取と片付けられない要素を含んでいる。先掲の久保田氏が指摘した撰取の例を再掲する。

⑳ともとみよなるをにたてるひとつまつよなくわれも
さてすぐる身ぞ
(166寄松恋)

わが身こそなるをにたてる一松よくもあしくも又た

ぐひなし

(『拾玉集』956一日百首・松)

まず、慈円歌から検討しよう。摂津国の鳴尾は古くから松を景物とする歌枕であったが、「なるをなるともなきまつにつれなくひとりもくれにたてりけるかな」(『散木奇歌集』雑部本1387「なるをにまつ（き）ひともとたてり」)以下、鳴尾の松は孤松として詠まれることが多くなつた。

『和歌初学抄』所名・原付松にも「なるをのひとつ松 たぐひなきにそふ」とあり、慈円歌は『和歌初学抄』の記述に則した詠み方をしている。また西行の「わがそのを（き）かへにたてる一松をとともみつゝも（き）をい（き）にけるかな」(『山家集』1546雑十首)をも念頭に置いているのであろう。しかし西行が孤松を「友」と見ているのと比較して、慈円は「我が身こそ」孤松であると詠んでおり、ここには「層深化した自己同一化が見られる。高潔であるがゆえに孤独な孤松に、我が身を重ねて詠んでいるのである。良経は、その慈円歌の詞を撰取して、「ともと見よ」と呼び掛け、「よなくわれもさてすぐる身ぞ」、すなわち良経自身も孤松と同様であると詠む。良経は「鳴尾に立てる一つ松」を自分ではなく、あくまでも他者として詠んでいる。それは、慈円が「我が身こそ」と、自身を「鳴尾に立てる一つ松」として詠んでいたことを踏まえ、慈円に応唱しているからである。この166番歌は恋歌であるから、一首のみで、孤松に

孤独な自分を「友」と見てほしいという内容であると解することはできる。しかし、慈円歌の表現を撰取し、応唱した歌であるという視点から見ると、自身も孤独すなわち慈円と同様であり、慈円に「ともと見よ」と詠み掛けていると解せるのである。

このように、慈円が孤独を詠み、その表現を撰取しながら良経が慈円に応えるという例は、他にも見られる。

②わがともとたのみし人はをともせでまがきのたけの
かぜのこゑのみ
(173寄竹恋)

身のうさに人のともをばはなれきぬまがきの竹よ我
をいとふな
〔拾玉集〕968一日百首・竹

慈円が、私は身の憂いのために人間の友を離れて山居へやって来たのだ、だから自分を厭わないで欲しい、と籬の竹に呼び掛ける。それに対して良経は、自分が「とも」と思っていた人は訪れて来ず、ただ籬の竹に吹く風の音だけがすると詠む。良経歌は「寄竹恋」題で詠まれた恋歌であり、一首だけを見て解釈するならば、不実な恋人を怨む女の歌である。しかし、慈円歌を背景として読むと、慈円の歌に対して、自分はあなたを友と慕っているが、あなたは訪れて来ないではないか、と怨むような詠み方である。その結果、良経の歌は恋題の歌ではあるが、慈円の和歌表現を撰取し、慈円と贈答する内容を有することで、「とも」

すなわち友人に対する恨みを表す内容になっている側面がある。②にも②と同様に、「とも」の詞が用いられていた。この「とも」とは、良経歌が慈円歌と贈答・唱和する内容を有することによって、直接には慈円を想定しているとは解することができる。慈円の表現や詞を撰取して詠んだ良経の歌は、恋歌ではあつても、その対象は慈円を想定した友愛の歌でもあると考えられるのである。

良経が慈円「一日百首」から詞や発想を撰取しているのは、単なる撰取というだけではなく、慈円の詠んだ詞を用いて、慈円の詠歌の内容に寄り添う形で、自詠を詠んでいるのである。

二

周辺歌人から詞や発想を撰取して自詠に詠み込むのは、文治・建久期の新風歌人に頻繁に見られることであり、特別なことではない。但し本百首の場合、百首歌そのものが、慈円「一日百首」を強く意識して企画されていることが、題の設定から窺われる。

「一日百首」の題と本百首の題を掲出する。ゴシックで示すのは部立である。

○一日百首(十題)

花 ……春

郭公 ……夏

月 ……秋

雪 ……冬

恋 ……恋

松・竹・山家・海路・述懐 ……雑

○二夜百首(二十題)

霞・梅・帰雁 ……春

照射・納涼 ……夏

霧・鹿・擗衣 ……秋

時雨・氷 ……冬

寄雲恋・寄山恋・寄河恋・寄松恋・寄竹恋 ……恋

禁中・神社・仏寺・山家・海路 ……雑

この二つの百首歌の歌題を比較すると、まず「一日百首」で設けられた四季題の花・郭公・月・雪が、本百首の四季題とは一つも重なっていない。花・郭公・月・雪は、それぞれ四季の最も基本的・代表的な歌題であるから、これらを全く排除した本百首の題は寧ろ異例で、「一日百首」を意識して避けたためと判断できる。更に、四角で囲んだ題について、「一日百首」の「恋」と「松」・「竹」を合わせて「寄松恋」「寄竹恋」の寄物恋題を設けていること、

更に山家・海路はそのまま取り入れていることが判明する。「一日百首」の題を、四季題は避け、恋・雑題は取り入れて、本百首の題は設定されているのである。そもそも「一日百首」の題も、『山家集』下所収の西行の百首歌の題と、六題が一致することを久保田淳氏⁵⁾が指摘しているが、一致しない松・竹・山家・海路の四題⁶⁾が本百首に取り込まれているのは、「一日百首」独自の題を重視した結果であると考えられる。つまり、本百首はそもそも最初から「一日百首」を強く意識して生み出されたものと推測できるのである。先掲した慈円からの表現撰取が、同題・類似題に偏在していたのも、題を設定した時点で既に「一日百首」を意識したものであることに由来すると考えられる。

山本一氏⁷⁾は、慈円「一日百首」の背景に、失望感・挫折感と結びついた隠遁志向があったことを指摘している。「一日百首」に慈円の孤独が表出していることを踏まえると、「一日百首」を強く意識して企画された本百首全体に、慈円「一日百首」に対する共感が通底しているのではないか。本百首は、「一日百首」と速詠という性質が共通するだけではなく、慈円「一日百首」の有する隠遁志向をも共有する百首ではないかと考えられる。

良経の有する隠逸志向については、諸先学によって論じ

られている^{キミ}。特に本百首の三ヶ月前に詠まれた「花月百首」が、西行回顧から企画されたものであり^{キミ}、西行の発想・表現を撰取することによって、憧憬・共感を表現することが伊東成師氏^{キミ}と稲田利徳氏に、更には西行を模倣する姿勢から生み出されたものであることが君嶋亜紀氏^{キミ}によって指摘されている。本百首にも「花月百首」と同様に西行撰取が見られ、そこに本百首の隠遁志向が認められることも稲田氏が指摘するところである。但し本百首がそもそも慈円「一日百首」を強く意識して詠まれたものであることを踏まえると、本百首における隠逸志向は、慈円「一日百首」の隠逸志向に共感して、表出したものであるという基本的な枠組みを考慮する必要がある。

三

百首歌の枠組みが、慈円への共感に基づく隠逸志向を有するならば、本百首の表現において、隠逸志向は重要な要素であると考えられる。そこで、慈円からの表現撰取とは他の観点から、本百首の隠逸志向について更に検討してゆきたい。本百首の特徴の一つとしてあげられるのが、「奥」の語を多用していることである。

みよしの、おくにすむなるやま人のはるのころもはか

すみなりけり (104 霞)

おくやまになつをばとをくはなれきて秋のみづすむたにのこゑかな (122 納涼)

もみぢふくあらしにつけてきこゆなりはやしのおくのさをしかのこゑ (133 鹿)

すみよしのきしにおいけるまつよりもなをくくふかき秋かぜのこゑ (185 神社)

ながきよにあさ日まつまの心にぞたかの、おくにありあけの月 (186 仏寺)

くもにふす人の心ぞしられぬるけふをはつせのおくのやまぶみ (187 仏寺)

やまざとよ心のおくのあさくてはすむくもなきところなりけり (191 山家)

おくのたにけぶりもたばわがやとをなをあさしとやすみうかれなむ (193 山家)

このように、本百首には「奥」が八例用いられている。

他の定数歌における用例数を示すと、「花月百首」二例、「十題百首」四例、「歌合百首(六百番歌合)」なし、「治

承題百首」二例、「南海漁夫百首」なし、「西洞隠士百首」

一例、「院初度百首(正治初度百首)」三例、「院第三度百首(千五百番歌合)」一例、「院無題五十首(老若五十首

歌合)」なし、「院句題五十首(仙洞句題五十首)」二例で

ある。本百首における八例という数が、際だって多いことが看取できる。

また、「奥」が用いられているのが宗教詠と山家題に偏在しており、更に「奥」と共に用いられているのが、破線を付したように「山」「谷」など、脱俗的空間を表す詞であることにも注目される。脱俗的空間を示す詞と共に「奥」が用いられているのは、俗世からより遠く離れようとする方向性、離れたいという志向を表している。つまり、単なる「林」「山」「谷」ではなく、それよりも更に奥深いところへと向けられた視線を表し、または簡単に辿り着くことができない所、目に見えないもの、直ちに感得しがいものを表現しようとしていると考えられる。曖昧・非限定的でありながら、求心的な働きを有し、いずこともわからぬがどこか究極の一点を指向する「奥」の意味^{キミ}が、本百首ではより遠い脱俗・より深い隠逸を表すために活かされているのである。但し、その表現として「奥」の語を多用するのは、たとえ「奥」が新風歌人の間で流行していた詞であったということを割引いても、方法としてやや単純なものであるかもしれない。「奥」の詞が即ち隠遁的な意味を担うものと即座に結び付けることはできないが、本百首における「奥」の多用は、その用い方から見ても、隠逸志向と結びついたものと考えられる。

また、山家題詠の五首についても、詳しく見てみよう。やまざとよ心のおくのおさくはすむべくもなきところなりけり

をのづからたよりにきけばみやこにはわがすむたにをしる人もなし

おくのたにけぶりもたばわがやとをなをあさしとやすみうかれなむ

やまふかみ人うとかりしともぎるのともとなりぬる身のゆくへこそ

心ありしみやこのともやまびととなりておもへばいは木なりけり

これらの歌が、山家に住まう立場から詠まれており、題の時点で隠遁志向を有するのは当然のことであるが、内容について詳しく検討してみよう。191番歌は、隠遁への志向が強固でなければ、山中は住むことのできない場所であると気付く。192番歌は、風の噂によると、都では自分の住む場所を知る人はいないと詠む。193番歌は、山奥の谷に隠棲していても、他者が生活していることを示す煙が立つと、我が住む場所はまだ深さが足りていないことが分かり憂鬱であろうと詠む。194番歌は、人に馴れていなかった猿ですら我が友となった自分の行く末を思案する。195番歌は、192番歌と関連して、心あると思っていた都の知人も、山中で

隠棲する身となつて顧みれば無情であつたことに気付いたという。192・195番歌に表れている人間の「友」に対する不信・離別と、猿を「友」と見る194番歌は表裏をなしているのであろう。傍線部を付したように、194・195番には「とも」の語が用いられているが、山家題以外の場所にも、本百首には「友」の詞が多用されている。

ともとみよなるをにたてるひとつまつよなくわれも
さてすぐる身ぞ (166 寄松恋)

こぬ人をまつにうらむるゆふかぜにともおもふつるの
こゑぞかなしき (169 寄松恋)

わがともとたのみし人はをともせでまがきのたけの
かぜのこゑのみ (173 寄竹恋)

あかしよりうらづたひゆくともなれやすまにもおなじ
月を見るかな (196 海路)

かもめうかぶなみぢはるかにこぎいでぬよそめばかり
やおきのとも舟 (199 海路)

これらの歌に見られる「とも」の用い方は169番歌のように「鶴」が主体であるものは別として、166番は孤松、196番歌は月を「友」として見ている。一方173番歌は、「友」と思っていた人は来ず失望させるものとして、199番歌は「友舟」が「よそめばかり」と距離を感じさせるものとして詠まれている。173番歌については、前節で慈円に対する贈答

の体で詠まれていることを指摘した。それを踏まえても、良経が本百首で「友」として見、親しんでいるのは、人間ではなく、猿・松・月といった、景物であることには注目される。

前節で、本百首における隠遁志向が慈円に対する共感を基盤として詠まれていることを述べた。166番歌は、表面上は孤松に「友と見よ」と呼び掛けているが、その背後には、孤松こそ自分自身であると詠んだ慈円の存在がある。恋歌でありながら、そこに詠まれているのが、慈円に対する友愛である側面があることも先に述べた。三木紀人氏^{キヨヒ}は隠者文学の系譜の中で、中古から中世にかけて「友」を求め、その一方で「友」が得られないことを嘆く文言が見られるようになることを指摘している。慈円「一日百首」に見る孤独は、やはり「友」を得られない嘆きであった。良経はそれに和して、恋題歌では、自分は慈円を「友」と見ていると詠み掛けていた。しかし、本百首における良経の心情は、雑歌に至って、自然景物へと共感の相手を移していく。良経自身もまた、人間を否定し、孤独へと沈んでゆくのである。こうした厭人傾向は他の定数歌には見られず、本百首の隠遁志向の特徴として指摘しうるものである。

百首歌を、配列されている題の順に従って詠み進めていったかどうかは不明である。また慈円すなわち人間の「友」

を詠み込むよりも、三木氏が指摘するような中世的隠者文学の系譜の上から、山家題や海路題では自然景物を「友」と詠む方が、隠逸志向の表現として自然であつたためという側面も考慮せねばならないが、四季題から恋題、雑題へと進むにつれて、良経は慈円との応唱から外れて、厭人傾向を示すようになる。慈円の孤独に対する共感から、自身の孤独の表現へと、心の通じ合う友を持つ隠逸から、人間の友を持たない隠逸へと、より濃厚な隠逸志向を見せてゆくのである。更には末尾で「あはれなりくもにつらなるなみのうへにしらぬふなちをかせにまかせて」(200海路)という、水平線と空がつながる広々とした海へ、風に船路を任せる旅を詠む一首に至る。この歌は「汎若不繫之舟、虚而遨遊者也」(『庄子』列禦寇)など老荘思想を踏まえ、何もものにも繫がれず自由に波間を漂う舟に重ね、束縛されない自由な精神を詠んでいる。脱俗空間への志向、慈円の孤独に対する共感・応唱、自身の孤独への沈倫と深まりを見せた隠逸志向は、末尾において、孤独ではあつても、自由な精神を獲得する境地に至っている。これは、山家題で詠んだような隠遁ではまだ不足で、海原へと舟で漕ぎ出し、どことも知れない所へと漂う旅に、隠逸の究極の姿と理想を見て詠出したと解することができる。百首歌の進行に従って濃厚になつた隠逸志向が行き着いた先が、どこか逃避

的な色合いを持つこの末尾の一首であることを考えると、良経の有する隠逸志向が、現実の中では解決のできないのであつたことも示していると考えられるのである。

四

さて、本百首と同じ機会に詠まれた慈円の百首歌についても検討を加えておきたい。「一日百首」を強く意識して良経が「二夜百首」を企画したことを第二節で考察してきた。良経の誘いのもと、定家と慈円が同題で和歌を詠んだ。冒頭で述べたように定家の詠は残されていないが、慈円の詠は、『拾玉集』に「当座百首」として収められている。跋文には、以下のよう記されている。

建久元年十二月十五六兩夜之間、左將軍於内裏直廬
伴定羽林令詠百首給云々并五時之間被終其篇
云々其後雖給題、歳末之比旁御修法勤行之間無寸
暇、聊不似安成故障、然而於幕内大略越年了。
而之間至正月廿二日猶御祈等雖不被結願、乘
急要令參大炊殿之時、不堪譴責、不能黙止、
慙以右筆、自申半至西半四季五十首詠進退出。
翌日自原歌平始恋雜五十首令詠進了并二時余也、於今度
落字歟、尤為恐為恥而已。

良経から題を与えられ、誘いを受けたものの、歳末の御修法・勤行などで多忙であつた慈円は、すぐには詠むことができなかった。百首を詠んだのは、年が明けてから、正月二十二日と二十三日のことであつた。良経よりも一ヶ月以上遅れて詠んだため、影響されたこともあつてか、慈円「当座百首」に良経「二夜百首」と重なる表現が見られることは、久保田氏が指摘するところである。

久保田氏は、慈円が良経の本百首に和したような作品が見出されると指摘する。その詳細は久保田氏の論を参照されたいが、更に以下の詠は、第一節で検討した慈円「一日百首」から表現を撰取して良経が本百首で詠んだ表現を、更に踏まえたものと見られることに注目される。詠まれた順を追つて、それぞれの詠歌を掲出する。

- ②② わがやどは花にゆづりてたちいでぬたづぬる人をよ
そにかぞへて 〔拾玉集〕90 一日百首・花
わがやどをむめにゆづりてたちいでむはなのあるじ
は人やとふとて (108梅)

山里のうめのあるじや誰ならむたちえばかりをよそ
にゆづりて 〔拾玉集〕141 当座百首・梅

- ②③ 千代ふともとけてややまむ結びつる身のうき事はい
はしろのまつ 〔拾玉集〕96 一日百首・松
さきの上にかなるたねのむすびけむうしともいま

はいはしろのまつ (168 寄松恋)

恋しともまたいはしろのむすび松とけぬ思を人ぞな
き 〔拾玉集〕1470 当座百首・寄松恋

②④ 身のうさに人のともをばはなれきぬまがきの竹よ我
をいとふな 〔拾玉集〕968 一日百首・竹

わがともとたのみし人はをともせでまがきのたけ
のがぜのこゑのみ (173 寄竹恋)

あらましにいく夜よどこを払ふらむ竹ふく風の音を友
にて 〔拾玉集〕1475 当座百首・寄竹恋

君こふと人のきけかしあられふる籬の竹の音計だに
〔拾玉集〕1478 当座百首・寄竹恋

②⑤ は、良経が本百首において、「宿を梅に譲つて出よう、
花の主が誰かと人が尋ねようとも」と詠んだ内容を反転
し、人が立ち去つた後の宿を訪問して、「この山里の梅の
主は誰であろうか」と問ひ掛けるものである。良経歌を受
けた内容となつてゐる。②⑥ は、「一日百首」詠および良経
歌と同様に、磐城の結び松を詠んでいるが、ここでは「憂
し」ではなく、「恋ひし」に「磐城一言はじ」を続けてい
る。この「恋ひし」ともまた、磐城の結び松」という表現は、
先立つ「一日百首」詠と良経歌で、「憂き」ことを「磐城
一言はじ」と詠んだことを意識し、「憂し」だけではなく
「恋ひし」とも言わないと詠んでいると解することができ

る。②の二首は、良経歌が詠んだ「竹を吹く風の音」と「籬の竹」の二つの要素を、それぞれ一首ずつ中心に据えて詠んでいる。「あらましに……」は良経が詠んだ、「友」の訪れが無く「竹を吹く風の音」だけがするという状況が、何夜にも渡って続いている様を詠んでいる。「君恋ふと……」は、「籬の竹」に音を立てるものを、風の音から籬の音へと転換している。慈円自身の「一日百首」から良経「二夜百首」、さらに「当座百首」へと続いているものがあるのは、良経が慈円に、更に慈円が良経に百首歌で和したという交流の跡を示していると考えられるのである。

結びに

良経の本百首の表現を、慈円からの表現撰取を中心に検討してきた。本百首が、「一日百首」題を撰取しつつ新たな題を組んで企画されたものであることを、慈円からの表現撰取と合わせて考察した。本百首の表現を検討すると、そこに数多く見出すことができる慈円からの表現撰取が、「二夜百首」という速詠百首歌の企画意識に深く関わるものであり、また百首歌を通じた良経と慈円の交流の跡を示すものであると考えられるのである。

文治・建久期、百首歌という形式で、他の歌人たちとの

交流から生まれた詠作が幾種も詠まれた。定家や家隆、慈円はそれぞれ同題を用いて百首歌を数多く詠んでいる。定家・家隆の「閑居百首」、慈円・定家の「早率露胆百首」などが喚起される。特に「早率露胆百首」題で、定家は再度「重奉和早率露胆百首」を詠んでいる。単純に同題で詠むだけではなく、「奉和」と題し、慈円の「早率露胆百首」に和して百首を詠んでいるのである。こうした文治期の歌人の交流が生み出した百首歌群は、単に競作というだけではなく、百首歌という枠組みを借りた贈答・唱和という性質を有していたことを窺わせてくれる。

文治・建久期の新風歌人たちは、積極的に周辺歌人の表現を撰取して、自詠に用いている。これは、その後の後鳥羽院歌壇にまで引き継がれ、新古今和歌の特徴としてあげることができるといえる。しかし、歌人相互の影響関係を考える上で、単に流行表現のプライオリティーを探るといふ点や、表現の意味を考えるとただでは、新古今時代にあればほど大量に、そして臆面も無く見える程の表現撰取がなぜ行われたかという問いの本質的な答にはならない。周辺歌人からの撰取については、各歌人で数量の上でも質の上でも差があるため、一概に論じることは困難であり、また危険も伴う。しかし、本百首について述べるならば、慈円に対する——慈円の隠遁志向、孤独への沈倫に対する共感の

表現という、良経の表現意識に深く根差した理由があげられるのである。

速詠百首歌における周辺歌人からの表現撰取について、例えば山本一氏は、慈円「早率露胆百首」には、定家の「二見浦百首」からの影響があり、それが定家の新風に対する共感や親近感を表すと指摘している^{三三}。慈円「早率露胆百首」の定家からの表現撰取が、第一の読者として想定される定家を意識した表現撰取であったのと同様に、良経も本百首において、同題で詠作することを誘った慈円の存在を強く意識しながら、慈円の「一日百首」から表現を撰取し、応唱を試みたのである。そのために、「二夜百首」が良経と定家だけではなく、慈円を誘う必然性があったと考えられる。年末から多忙のために詠進が遅れていた慈円が、「譴責に堪えず、黙止すること能はず」と跋文に記す程に、良経が熱心に慈円を誘った理由も、本百首の企画が慈円の参加を抜きにしてはあり得なかつたことによると推測できる。

良経と慈円の和歌を介した交流は、良経と慈円の家集『秋篠月清集』『拾玉集』所収の、贈答歌や百首歌から跡付けられることができる。特に、良経の妹である宜秋門院任子の妊娠・内親王出産、建久の政変と、九条家にとって大きな転換点となった建久期後半には、二人が同題を用いて詠んだ

百首歌が集中している。治承二年「右大臣家百首」の題を用いた「治承題百首」(七卷本『拾玉集』に「廿題百首」として収められる)、歌合として番えた「南海漁夫北山樵夫百番歌合」、「西洞隠士百首」・「四季雑各廿首都合百首」がそれである。これらの詠作には、良経・慈円ともに九条家の一員としての意識が表出している^{三三}。九条家の一員、それも政治面・宗教面それぞれから九条家を支える最上層の人間として、共通する目的や基盤をもとに詠まれた、政治性を濃厚に有する詠作群である。

しかし、良経の慈円に対する共感は、同じ九条家の一員であり、更には叔父と甥であるという立場を越えて、慈円の孤独感や隱逸志向に対する良経の個人的な共感があったことも、文治期の贈答歌から谷知子氏^{三三}と櫻田芳子氏^{三三}が指摘するところである。本百首からも、九条家という家の意識のみならず、慈円の孤独や隱逸志向に対する、和歌を介した共感が良経に根強くあつたことを窺わせてくれる。

なお、慈円ほどではないが、定家からの表現撰取も多いことを、第一節の冒頭で指摘した。詠作が残されていないものの、定家も本百首に加えられていたことを顧みると、定家からの表現撰取にも、定家の新風表現に対する共感の表れを想定すべきかもしれない。但し、慈円とは異なり、

良経は定家にとって主家筋にあたり、立場に高低があるから、慈円と同じ位相では考えにくい。本百首の表現と定家の関わりについては、別稿にて検討したいと思う。良経と慈円の二人が本百首の企画の中心であり、定家はそれに加えられた形と推測されるが、定家が参加させられたのは、先述のように文治期に定家と慈円が、和歌それも速詠を通じて交流を持っていたことを意識してのものではないか。慈円や定家よりも年少の良経は、文治期の歌人同士の交流には、出後れた感がある。定家と慈円の間で交わされた速詠百首歌を通じて交流を、自らが企画して催したのが、本百首であったと考えられる。

本百首で検討してきた、露わな慈円からの表現撰取は、新たな表現の創出という視点から見ると、模倣に終わっているものも多いことは認めざるをえない。しかし「一日百首」に和するという本百首の枠組みの中に、慈円から表現を学び撰取した歌が点綴されることは、本百首の第一の読者として予想された慈円に対する共感および敬意の表明となりえたと考えられるのである。その後、『秋篠月清集』に「花月百首」に続く第二番目の百首歌として収載していることから、良経の詠作上に、本百首が意義を持つていたことを認めるべきであろう。その意義の一つは、本百首が慈円との交流、慈円への共感から生み出された記念であっ

た点にあるのではないかと考えられるのである。

〔注〕

(一) 久保田淳『新古今歌人の研究』(昭和四十八年、東京大学出版会) 第三篇第二章第三節四「二夜百首と十題百首」。以下、特に注記しない限り、久保田氏の論はこの論文による。なお久保田氏は、本百首跋文の「風情を廻らさざる者也」を「佳作が乏しい」の意に解しているが、稿者は本論中で述べたように解し、あくまでも二夜で詠んだ速詠であることを強調した言と取った。

(二) 『拾遺愚草員外』の「いろは四十七首和歌」跋文に「大將殿よりいろはの四十七首をつかはして、御使につけてたまつるべきよし侍しかば」とあり、これは良経が自身でまず「いろは四十七首」を詠んでから、それを送って見せ、定家にも詠ませたものと考えられる。

(三) 稲田利徳『西行の和歌の世界』(平成十六年、笠間書院) 第四章第二部「西行と良経」。以下、稲田氏の論はこの論文による。

(四) 新名主祥子『「六百番歌合」の恋題をめぐって』(『国語国文学研究』18、昭和五十八年二月)

(五) 櫻田芳子「文治五年秋、良経・慈円・寂蓮の贈答歌について」(『言語・文学研究論集(白百合女子大学言語・文学研

究センター』4、平成十六年)に詳しい考察がある。

(六) 家隆『初心百首』の詠歌年次については、茅原雅之「藤原家隆の『初心百首』成立についての一考察」、『中世文学』40、平成七年六月)の考察に依った。

(七) 『万葉集』141(有馬皇子)・143・144(共に長忌寸意吉麻呂)番歌。なおこの故事は歌論書でも、『綺語抄』『俊頼髓脳』『和歌童蒙抄』『奥義抄』『袖中抄』『和歌色葉』『色葉和難抄』に引かれている。

(八) 田中宗博「捨身飼虎説話と和歌」、『古代中世和歌文学の研究』平成十五年、和泉書院)所収)参照。

(九) 山本一「慈円の和歌と思想」(平成十一年、和泉書院)第三章2「一日百首」

(十) 前掲注(一)久保田氏著書第三篇第二章第三節二「速詠の流行」。なお「一日百首」の題は、初めに百首を詠んだ隆寛の出題である。

(十一) 丸山正道「慈円の『一日百首』考」(一)『弘前大学教育学部紀要』87、平成十四年三月)は、「一日百首」の題が『堀河百首』題を参照したものであるかと指摘する。西行の百首と重ならない四題は、丸山氏が指摘するように、全て『堀河百首』の雑題に含まれている。

(十二) 前掲注(九) 山本氏著書

(十三) 本論であげたもの以外に、以下のような研究がある。安

藤勝志「藤原良経の隠者的姿勢」(『愛知大学国文学』7、昭和四十一年三月)、脇谷英勝「藤原良経の人生詠の考察——その本質と中世の意味——」(『日本文学』8、昭和四十八年十月)、片山享「良経 定家の眼——政治力への不満と文藻への敬愛」(『国文学』26—16、昭和五十六年十二月)、久保田氏注(一)著書、田淵句美子「中世初期歌人の研究」(平成十三年、笠間書院)第二章「藤原良経」など。

(十四) 前掲注(一)久保田氏著書第三篇第二章第三節三「花月百首」

(十五) 伊東成師「藤原良経の本歌取りについて」(『学習院大学国語国文学会誌』20、昭和五十五年三月)

(十六) 君嶋亜紀「藤原良経『花月百首』考——西行撰取をめぐって——」(『風土と文化』4、平成十五年三月)

(十七) 寺島恒世「歌語『奥』考」(『国語国文』56—10、昭和六十二年十月)参照。

(十八) 三木紀人「『友』への希求と絶望——隠者文学をめぐって——」(『国語展望』57、昭和五十六年)

(十九) 前掲注(九) 山本氏著書第三章1「早率露胆百首」

(二十) これらの詠作に見る、良経の政治意識については、以下のような先行研究がある。前掲注(一)久保田氏著書第三篇第二章第三節「南北百番歌合と治承題百首」、寺田純子『古典和歌論集——万葉から新古今へ——』(昭和五十九年、笠

間書院) 所収「建久末年の藤原良経——その述懐歌をめぐって——」、片山享「建久期における藤原良経の述懐歌」(『文学研修』96、昭和五十九年七月)、谷知子「中世和歌とその時代」(平成十六年、笠間書院) 第二章第一節「治承題百首」「南海漁夫百首」の世界——『新古今集』巻頭歌の生成——、石川一「慈円和歌論考」(平成十年、笠間書院) II 第二章第六節「良経及び慈円の失意表現——『源氏物語』・俊頼などの受容を中心に——」、岡部寛子「建久末年における藤原良経——『南海漁夫百首』述懐歌について」「北山樵客百首」との比較における考察——」(『富山商船高等専門学校研究集録』27、平成六年三月)、同「建久末年における藤原良経——『西洞隠士百首』雑歌について」「詠百首和歌」との比較における考察——」(『富山商船高等専門学校研究集録』29、平成八年七月)、内野静香「良経『南海漁夫百首』考——述懐性の分析を中心に」(『広島女子大國文』15、平成十年九月)、同「良経『治承題百首』『西洞隠士百首』考——九条家失脚を軸として」(『日本研究』13、平成十一年十一月)、拙稿「藤原良経『西洞隠士百首』考——四季歌の漢詩文撰取を中心に——」(『人文知の新たな創造に向けて』第二回報告書IV「文学編」論文、平成十六年三月)

(二十一) 前掲注(二十) 谷氏著書第二章第四節「藤原良経の『隠遁』志向」

(二十二) 前掲注(五) 櫻田氏論文

和歌の引用本文および歌番号は、以下に記さない限り新編国歌大観による。濁点は私意。ミセケチのある箇所は、訂正後の本文のみを引用した。『秋篠月清集』『和歌初学抄』：天理図書館善本叢書(八木書店)、『拾玉集』：多賀宗隼編『校本拾玉集』(昭和四十六年、吉川弘文館)、『拾遺愚草』、『拾遺愚草員外』、『長秋詠藻』、『散木奇歌集』、『新古今集(文永本)』：冷泉家時雨亭叢書(朝日新聞社)、『壬二集』：国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇第七・八巻私家集1・2(平成十三年、臨川書店) 所収高松宮旧蔵本、『山家集』：久保田淳編『西行全集』(昭和五十七年、貴重本刊行会)、『物語二百番歌合』：『物語二百番歌合』(昭和十五年、貴重本刊行会)、『和歌童蒙抄』：『和歌童蒙抄』(昭和五十年、古辞書叢刊刊行会) 所収尊経閣文庫蔵本、『風俗歌』：日本古典文学大系3『古代歌謡集』(昭和三十二年、岩波書店)、『梁塵秘抄』：新日本古典文学大系(岩波書店)

(こ)やま じゅんこ・本学非常勤講師)